

日本・地域経営実践人財養成講座

—居合わせた者よ、いきさつの語り部となれ—

平成 24 年 12 月 14 日

はじめに

目次

- 1 はじめに
- 1 岡田先生あいさつ
- 2 四面会議・各部門最終提案
- 3 柿本先生、山田先生による講演
- 4 最終実践行動計画の確認と確定
- 4 人財養成塾に参加しての感想
- 4 おわりに

第 5 回の人財塾が平成 24 年 11 月 23 日（金）に京都大学黄檗プラザで開催されました。

午前は、本塾が目指す所や今なぜ地域経営が重要であるかを確認、また飯田を視察した感想を岡田先生よりお話頂きました。その後、四面会議各部門の最終提案、議論が行われました。

午後は、熊本大学よりお越し頂いた柿本先生、山田先生より御講演を頂いた後、両先生も交え本塾の最終実践行動計画の確認と確定を行いました。

スケジュール

午前の部

9:30 ～10:30 岡田先生あいさつ

なぜ 3.11 にこだわるのか？がけっぷちに立つ日本。

本塾が目指す地域経営の根本を今一度確認する。

10:30 ～12:00 四面会議・各部門最終提案、議論

午後の部

13:00 ～ 14:30 柿本先生、山田先生による講演

熊本大学自然科学研究科に開設になった「附属減災型社会システム実践研究教育センター」と今年度後半から始まる「文部科学省大学間連携事業」の目指すところと、本塾への期待

14:30 ～ 15:15 四面会議

部門間の最終検討と提案のとりまとめ

15:30 ～ 16:00 最終実践行動計画の確認と確定

16:00 ～ 17:00 全体のまとめ、人財養成塾に参加しての感想

岡田先生あいさつ

震災によって住み方をどうするのかという問いが我々に突き付けられた。これに対し、地域が主体的に、身の丈に合った形に変えてゆく営みを実践できるようにすることを目指してゆく。

今回の震災によってこの日本列島に住む私たちはどういった住み方をするのかという問いを改めて突き付けられた。南海トラフなどで今後も大地震がいずれ起こることは予想されているし、そうでなくとも日本全体が人口減少といった未経験の課題に対し、どのように適応し、対応してゆかが問われている。塾の目指すところは、地域が主体的に実践して身の丈に合った形、つまり住民を真ん中に置いた形に変えてゆく営みとして地域経営のまちづくりができるようにすることである。

そのためには地域においてイニシアティブを取れる人が必要だが、この人を中から、あるいは周りからサポートする。そのような人財や知識技術が求められる。さらにそこで生まれた体験やノウハウを中に留めておかず、外に出すことも必要。一つの地域で得られたノウハウを別の地域で使い、さらにそこで改善してゆくプロセスを繰り返す。そこでは話されたことを文字で綴ることが必要になるし、問答できる人が求められる。「修」「破」「離」という言葉があるように、まずは基本の型を身に着ける。そこで留まらず、「破」と「離」ができる人を育てることが重要になる。そのためには、文字で綴るとともに、それを使って問答し、またそれを文字に起こす。これを皆の共有の知恵の財産としていく。この問答は基本を修めた者が、目指すべきことで、自ら問いを発することで「破」が起こる。私たち「先導役」はいわばメンターのような役割でそれに答えるように努める。そこに先生と生徒が融合し、「先生徒」の関係が生まれてくる。こうしてお互いに学び合うのだ。ほかのまちづくり塾とは異なる点がここにある。

先週、飯田に事前視察に行ってきたが、公民館がとても活かされており、智頭や内子などとはタイプの異なるモデルが存在すると感じ、非常に期待が持てた。厳しく貧しい環境という地域背景から自分たちで切り盛りしなければ生き残れないという感覚が生まれ、「公民館ネットワーク」を活かして体制内改革を効果的に進めてきたように思われる。こうして地域運営（＝地域が途絶えることのないように体制を維持し続けるためのルーチンを守ること）に終わらせず、地域経営（＝地域が存続するために自らを変えながら存在し続ける営みを継続的・戦略的に進めて行くこと）を同時に進めるという「飯田モデル」が生まれたのではないかと思う。「公民館という現行のシステム」の限界はあるが、そのぎりぎりのところを集落に住む人たちが自ら追求していくという気風がそれを支えていると感じた。実はそのような「体制内改革」すらできていないところが大半である。いや、むしろそれはまったく見込みがないので、それを打ち破る形で仕掛けられた改変の一つが智頭モデルではないか。地域経営という観点からまちづくりを学んでいく場合に、理解を「破」のレベルに持って行くためには、まちづくりの多様性にも配慮が必要である。この意味で「飯田モデル」が出てきたのは大変意味のあることである。

四面会議・各部門最終提案

各部門からの発表に先立ち寺谷さん、岡田先生よりコメントがありました。その後、各部門から最終提案のまとめが発表されました。

ー寺谷さん

地域がどうありたいか、そのような意志が近年の西日本の各地域からは全く感じ取れない。地域の行末を成り行きに任せてしまっているがこれではいけない。映画「七人の侍」は実り豊かな村を野武士が襲うのに対し住民が7人の侍を雇い対抗するといった話だが、それは守らなければならない程豊かな村が存在していたということを示している。自分達の村は自分たちで守らなければならない。そのためにはまず個々が自己経営できているかが問われる。

ー岡田先生

外部からまちづくりに携わる際には自らを問われる。地域で行われているまちづくりやその手法に対する指摘を行うとそれがそのまま自分に帰ってくる。自らを客観視することがなければ外部から入って行く事などできない。ともすれば宗教的にもなり得るため相対的感觉を持つことが必要。説得するのではなく、選択するためのサポートとして相対関係から気づきを与えられるだけである。気づきを与えられるかどうかは話の「辻」をどう見つけるかが鍵となる。

ーマネジメント部門

全てを我が事として捉え何をするか何ができるのかを判断できる人物、悶え苦しみ問答し臨機応変に対応できる人物を養成していきたい。提案を一度は言語化して記録しておくことも大事であるが、今回提案した内容が日々更新されていくことは必要。

ー情報広報部門

情報を発信することだけにとらわれるのではなく総合的な観点から物事を捉えることが重要。人に訴えかける際には心を伝えるべきでありロコミが持つ可能性が大きいことを感じる。また、情報を受信する姿勢・体制も築いていかなければならない。

ーシステム部門

塾生参加型のスタイルは今後も継承されていくべきである。現在学生がニュースレターを作成している要領で、塾生が講演や現場での実戦経験を文章化しデータベースを作成することが必要である。将来はその内容を教材に反映していく。

ー人財養成部門

精緻な議論もせずスタートするのは非常に不安。マネジメント部門が提案した1年目目標対象者数として初級200名とあるが上手くいくのか、どのような考えでその数字を提示したのかその根拠を明快にして欲しい。（検討結果は後述「最終実践行動計画」を参照）

柿本先生、山田先生による講演

ー柿本先生

山都町の菅集落という土砂災害が多い地域がある。かつては住民が助け合いながら自力で避難できていたところだが、現在は高齢化が進んで災害への対応が困難な状況にある。そこで避難訓練や勉強会などの対策を行ってきた。そのような取り組みがロコミで伝わり、行政等からの依頼でいくつかの地域で防災まちづくりを行っている。熊本市の壺川地区では遊水池ができたことで洪水が減り、かつてとは住み方が変わってきている。それとともに災害対策も変わってきた。先日の水害では地区によって対応に差が見られ、まちづくりをやっているところとやっていないところで防災に対する備えが全く違うと感じた。

これまでの経験から、道具立てを知っているファミリードクターのような、人の話を正確に聞ける人をどうやって育てるかが重要だと感じている。まちづくりは基本的に住んでいる人が責任を持ってやらないといけない。地域の内側でイニシアティブを取る人と外から地域を客観的に見てサポートする人との棲み分けが大切になってくると思う。

ー山田先生

地域に入ることで改めて現場のことを知らないということに気づかされる。住民の方は、いつ起こるかわからない大災害よりも、まずは目の前の介護・福祉といった地域の問題解決から望まれることが多く、一足飛びに減災活動までは行き着かない。一見遠回りにも見えるが、他部門との連携が必要。

問答できる人財が必要とお話があったが、そのような人を育てるには教員ともども地域に入って互いに勉強する経験が大切だと感じている。3.11の映像を見てCGのようだと言っていた学生も、ボランティア等で地域に入ると自分の身のことのように感じて動くことができるようになってきた。地域内の防災・減災活動にヒーローは要らない、むしろ居たら後継者がうまく育たない場合が多いように感じている。あまり意識せず、自然とまちづくり活動に刷り込まれた減災活動が必要と感じる。



まちづくり活動に刷り込まれた減災活動が必要である。現場では人の話を正確に聞ける人、問答できる人が求められている。そんな人材をどのように育てるか。地域に入り、現場を知ることから始まるのではないだろうか。

最終実践行動計画の確認と確定

議論の時間の多くは塾がどのような人財輩出を目指すのか、本塾がどのような組織を目指すのかといった幹の部分に関する意見交換、イメージの共有に充てられました。その後、岡田先生より「背伸びするのではなく出来るところから身の丈に合う範囲で進めていこう」との提案があり、直近の行動計画が定まりました。議論された内容は以下の通りです。



－塾が目指すべきところ

これまでの学問の真逆に行くようだが直観的な物事の判断を重要視し、これを形式知とする。まちづくりを進める際の暗黙知を引っ張りだし、分析・整理した上で技術として使うことを目指す。そして、それを広く伝えていく。

－行動計画

- 来年度は対象者を学生とし初級のみの開講とする。人数はマネジメント部門が提案した数から一桁落とした数を想定。
- 来年度、熊本大学で行われる授業の一部として本塾が授業を提供する。
- 社会人向け初級講座のあり方を模索するため京都で初級講座をプレオープンする。
- 今後、熊本大学以外に京都大学、立命館大学、関西学院大学において本塾による授業の提供を目指す。

人財養成塾に参加しての感想

本日の終わりに参加者の皆さんから人財養成塾に参加しての感想を述べて頂きました。本塾立ち上げの中心である平塚さん、寺谷さん、岡田先生の言葉を以下に記載します。

－平塚さん

改めて日本語の持つパワーというものを感じた1年であった。忘れ去られていた言葉の綴り方というものを見つめなおすことでこれがコミュニケーションの基本となる、古くて新しい手法であると感じた。

－寺谷さん

自分の考えはごく一面であり、他人の文字を通じて学ぶことができることを大変幸せに感じた。決してお金では代えられない、学ぶことは何事にも代えがたい。

－岡田先生

これまでの経緯はすべて必然のなせるわざであり、自分の人生にとっても意味のあるものになりたい。道を決めたら必ず突破する覚悟でいる。

おわりに

今年の人財塾も残すところ12月15日、16日の飯田市見学のみとなりました。一年を通して塾を立ち上げてきた御三方をはじめ本塾に関わる皆様は熱意に溢れておられました。それに比べますと私たち若い学生達は幾分おとなしく映り、皆様方の姿勢を学ばなければならないと感じております。この一年間実に多くのことを学ばせて頂きました。この場をお借りしお礼申し上げます。大変ありがとうございました。